



経済学部の新たな取り組み

経済学部長 青木 研



今年度から経済学部長を務めております、経済学科の青木研です。研究分野は、産業組織論・医療経済学で、医療制度改革が病院行動へ与える影響に関する分析や病院間の競争に関する分析など、医療サービス市場の産業組織について研究しています。学部の講義では、経済学科のミクロ経済学や産業組織論を担当しており、経鸞会の若いメンバーの中には必修のミクロ経済学で苦い思いをした方もいるかもしれません。

経鸞会からは、学部の講義や講演会の開講、経鸞会奨学金などで、経済学部の活動や学部学生に対し多大なご支援をいただいております。感謝の意を込めまして、ここでは皆さんが卒業された経済学部の新たな取り組みについてご紹介しましょう。

1) 英語による専門科目教育の強化

現代は、世界のグローバル化がすすみ、大量のヒト・モノ・カネが国境を越えて移動する時代になりました。この様な時代に社会へ出ていく学生にとって、「英語」と「経済」はともに必須の教養になったと言えます。そこで、英語で経済・ビジネスに関する内容を理解し、英語で経済・ビジネスに関する内容を伝えることのできる学生を育成するため、経済学科では2016年度から、英語で経済学を学ぶ「経済学部・経済学英語特修プログラム」を開設しました。経営学科では2018年度から開始の予定です。

英語特修プログラムでは、学科の専門科目が多数、英語で提供されており、要件を満たした学生には修了証が授与されます。まだ始まったばかりですが、学生の関心は高く、半数近い学生がプログラムに登録してくれています。経済・経営の専門科目を英語で学ぶことを通じて、経済学部生の海外留学や卒業後のグローバルなキャリア形成を支援して行きます。

また、全学的な取り組みである SEMEP (Sophia English Medium Education Program) では、経済・経営学科ともに英語の授業科目のみで学位を取得できるコースの開設を進めています。

2) 実践的な教育の実施

新たな取り組みの2つ目は、社会の要請に対応した実践的な教育の実施です。ビジネスの第一線で活躍する実務家を講師に招いて課題解決型の講義を実施しています。ほんの一例になりますが、つい先日、8月には、上智大学、香港中文大学と経団連による連携講座「Challenging Frontline Issues in Global Business」が開講されました。

この講義では、香港中文大学の学生、本学経済学部の学生がそれぞれのキャンパス、香港と四谷のキャンパスに1週間ずつ滞在し、野村ホールディングスから提示された金融ビジネス上の課題を解決するため、両大学混合の2チームが英語でグループワークに取り組みました。

最終日には、経営学科の網倉久永教授がコーディネートする中、野村ホールディングスの幹部を前に、それぞれのチームが新たなビジネスモデルを提案するプレゼンテーションを行いました。学問的な成果はもちろんですが、香港と日本という異なる言語、異なる文化的背景を持つものが協働で1つのプロジェクトを遂行できたことは、学生にとって貴重な経験となりました。経済学部のWEBサイト (<http://dept.sophia.ac.jp/econ/>)、2017年9月6日のNEWSでプレゼンテーションの様子をご覧いただけます。

3) 「人間の安全保障」実現に取り組む国際的研究拠点の形成

新たな取り組みの3つ目、こちらはまさにこれからの取り組みで事業の申請を行っている段階ですが、上智大学を「人間の安全保障」実現に取り組む国際的研究拠点大学とすべく、経済学部も1つの核となって取り組みを進めています。この事業では、貧困、環境、医療、難民、平和構築の5つを、国際社会が抱える人間の安全保障上の重要な課題と位置づけます。そのうえで、これらの課題解決に有効な政策・制度の設計を社会科学の研究手法を用いて行う国際的な拠点大学となることで、学問的な研究を通して人間の安全保障実現に貢献することを目指しています。

「叡智(ソフィア)が世界をつなぐ」を建学の理念に掲げる大学として、学術研究をもって人間の安全保障実現に寄与するというのが上智大学らしいアプローチだと考えています。

以上、駆け足でしたが経済学部の新たな取り組みをご紹介しました。新たなチャレンジを続ける経済学部を、これからも変わらずご支援いただけたらと思います。

経鷲会「女子部会」がスタートしました

福田順子 (1968年 経・経)

昨年の経鷲会総会で「女子部会」の開設が議決され、「エコノミアン」でメンバー募集を開始し、今年の4月より活動をスタートしました。4月以降、偶数月の第一土曜日にミーティングを行っています。毎回、全員参加というわけにはいきませんが、熱心なメンバーが参加していただき、さまざまな意見を戦わせています。女子のみでなく、経鷲会の会員もオブザーバーとしてご参加いただいて側面からの応援をいただいています。

「女子部会」としての第1回の活動は、5月のオールソフィアンズフェスティバル (ASF) での「親子で楽しむパソコン解体体験」でした。当日、ASFにいらした方は、正面入り口を入れて右手のテントで、子どもたちがパソコン解体に熱心に取組んでいる様子をご覧いただいたと思います。このイベントは、部会長の福田が勤務している城西国際大学環境社会学部との共催で実現しました。環境社会学部では、過去7年間、近隣の子供たちに毎年数回、この解体体験を環境教育として実施してきた経験があります。

本イベントの目的は、パソコンに使われている有限な地下資源 (レアメタル) をパソコンから取り出してリサイクルすることで、持続可能な社会の実現に貢献すること、また、この体験を通じて未来を担う子どもたちに環境保全の重要性を感じてもらうこと、にありました。資源の有効性とリサイクルの意味を知り、経済と環境のバランスを考えて持続可能な社会を実感する、という大きな構想と小さな環境教育でもあります。

総勢で親子150名ほどのご参加があり (時間的な制約もあり残念ながら参加をあきらめた子どもさんも何組ありました)、城西国際大学から参加した3名の学生・卒業生は、これまで7年間で最大規模の参加者だと喜び、さすがに上智大学だと、感心しておりました。

1台のパソコンを、一人1~1.5時間で解体するのですが、下は3歳から、上は中学生まで、男女の子どもたちが賑やかに、楽しそうに解体していました。解体し終えたパソコンの部品や材料を、自分で分別箱に入れて終了です。お土産は、解体後の素材を1個と、レアメタルの知識をまとめたメモで、リサイクルの大切さを実感してもらえたと思います。

現実問題として、レアメタル (希少金属) といわれるように、地下資源は有限で、現在埋蔵されている量しか地球上には存在しませんから、リサイクルする以外に、この有用で希少な金属を残す道はありません。現代人に必須で便利な道具 (自動車、携帯電話、パソコン、家電製品、医療用器具等々) には多くのレアメタルが使われています。リサイクルしなければ埋蔵量は日々、減る一方です。しかも、日本では採掘できません。全て輸入です。

そんな環境保全の一翼を、子どもたちが担ってくれました。

こうした意味ある活動を、女子部会では企画したいと考えています。上智大学、経済学部のためになること、また、女子卒業生・在学生のための知識の修得のために、勉強会や見学会なども企画したいと思います。

多くの女子卒業生のご参加をお待ちします。

(女子部会 福田順子 (連絡先 jfukuda@jiu.ac.jp))



最近の旅で得たもの

小林 保 (1964年 経・商)

退職して十数年たった今は、すっかり自己ペースの生活に慣れてしまった。このため適度の緊張や新たな体験が生活の中に必要と思っている。海外旅行はその条件に合う貴重な機会だ。今年は、ベネズエラとポーランドに行った。毎回いくつもの思い出を作るが、今回の旅は今までにない経験が印象に残った。

ベネズエラ訪問の第一の目的は、ギアナ高地にある世界一の落差 (979m) を誇るエンジェルフォールを見ることであったが、実は、それ以上にワイルドでスリリングだったのが二つの滝である。

カバックの滝はギアナ高地にあるエンジェルフォールの観光拠点のカナイマ (ベネズエラの南東でブラジルの国境に近い) から小型機で40分、川を遡った洞窟の中にあった。最初の難所は川幅10m、水深2~3mの渡河であった。川の兩岸の木に結び付けたらりと垂れ下がったロープづたいに進むのがルートで、ほぼ金槌状態の私達夫婦はかなり躊躇した。「怖いから嫌だ」とも言えず、家内も私も勇気をふりしぼって何とか渡り切ることができた。そこから少し進むと水深6mの淵に出たが、この淵とその先のつるつるの岩に囲まれた急流が次の難所であった。現地ガイドはほとんど手助けしてくれないので、淵では身体が水中深く沈まないように、急流では流されないようロープに掴まって進んだ。初めの内は家内に声をかけ気になっていたが、途中からは自分の事だけで余裕は全く無くなり、溺れる恐怖と闘いながら、必死で滝まで辿りついた。



もう一つのサポの滝はカナイマの近くにあり、滝の裏側の細くてすべりやすい道を進まなければならない。ロープはあっても滝壺側なので怖くて掴めない。雨季の大量の水が強風を引き起こし、あたかも暴風雨の中を歩く様だった。メンバー数人で手を繋いで進んだが、家内は、時々、滝壺に吹き飛ばされそうになり、「生きた心地がしなかった」そうである。

二つの滝は過酷でスリルに満ちていたこともあって、エンジェルフォールをはるかに凌駕する印象であった。歩いている間は怖さと緊張で「こんなひどい事をさせる旅行はとんでもない」と思ったが、終わってみれば曰く言いがたい不思議な充実感が残った。

ポーランドでは、アウシュビッツの収容所で聞いた話が考えさせられるものとなった。ガイドは日本人の中谷さんと言う方で、収容所の説明自体はさらりとしていて、むしろ物足りないくらいであった。しかしホロコーストの説明で彼が強調した話は、強烈な衝撃を与えた。彼は、人間誰でも持っている「あの人は何となく嫌だと言う気持ちが、ホロコーストの元凶である」と言った。また、特定の人達を嫌う風潮が広がっていくと、例え選挙という民主的なステップを踏んだとしても、予想もしない結果を引き起こす、ということを見せてくれたのである。

ドイツでは、第一次世界大戦中、反ユダヤ運動は起きなかった。しかし大戦後、「ユダヤ人と社会主義者が足を引っ張ったので、戦争に負けた」という風評が広がっていき、その中で「民主的」な選挙で政権を得たのがナチ党であった。ナチ党は結党当初から反ユダヤ主義を唱えドイツ国民の大半がこの反ユダヤ思想に傾いていったのである。

ナチが最初に行ったのは「ユダヤ人に対するボイコット命令」で、当初はユダヤ人の商売を嫌がらせる程度であった。ところが、「ユダヤ人と社会主義者の公職追放」や「医師・弁護士・大学教授の追放」へと、次第に激化していき、1937年には「ユダヤ人資本の企業は解体か売却」という法律が出された。その後、隔離政策でゲットーという名の居住区域が定められ、第二次大戦の不利な戦況が進むに従ってユダヤ人に対する大量殺人へと転換した。同じ国に住み、同じ言葉を話す人間を、人種が違うというだけで歴史上例をみないむごい仕打ちが行われたのである。

翻って、もし外国人が私の生活圏に入ってきて、自分の生活を脅かされた時、「いいじゃないの、我慢しようよ」とおおらかな気持ちで持てる自信は無い。当時のドイツのように自分の利益や気持ちを具現化してくれる人がいたら、そちらを選ぶのではないだろうか。中谷さんの「何となく嫌だと言う気持ちは恐ろしい」「民主主義でもおかしい方向へ行ってしまいますよ」と言う警告が心に残った。

第二の人生、未来の子ども達のためになることを…

戸川 清 (1971年 経・経)



2011年3月のあの日、私は会社の仲間と新宿三井ビルの50階にいました。ちょうど茨城県、福島県の2箇所の工場を結んで、電話会議を開いていたところでした。突然の大地震に工場側のパニックが音だけで伝わってきます。「大丈夫か？」の呼びかけにも応えはなく、とりあえず会議に使っていた直通電話だけは切らずにおくように指示して会議は中断しました。やがて、新宿三井ビル自体も大きく揺れはじめる中で、社内の災害対策本部を立ち上げ、茨城県、福島県、宮城県の従業員の安否確認作業を開始しました。

茨城県、福島県に点在するほとんどの工場が深刻な地震の被害を受けましたが、中でも福島県浪江町の2工場は原発から5km程度の距離でしたので、全員が取るものも取り敢えず強制退去せざるをえませんでした。東日本大震災と津波から約6年半の時が経過した今でも、テレビ画面の速報で伝わって来た津波の衝撃的な映像、ビニールハウスが、農地が、車が、住宅が次々と濁流に飲み込まれて行く様子は、今でも昨日の事のようにまぶたの裏に焼き付いています。

42年間の会社勤務を卒業して、第二の人生を歩み始めて4年半が経過しました。この間に、東北被災地支援のプロジェクに加わり、気仙沼市の牡蠣養殖復興の手伝いに出かけたこともありましたが、どう考えても素人の自分が現場にいても足手まとい、現地復興生産される海産物を購入して来ること位しか真に役に立つことは無いと悟りました。自分なりの被災地復興支援活動を模索していた3年ほど前に、長年の知人を通じて「NPO法人 地球環境開発研究会（本部、茨城県笠間市）」の存在を知り、「長年にわたり農業や重金属などで汚染された土壌を、次世代の子どもたちのために改善し、食の安全が確保出来る強い有機農法を世界に広める」と言う、理事長の「大義」に共感して活動に参加することにしました。

すでにこのNPO法人では、過去15年余り、茨城県を中心とした契約農家さんで土壌改良による農作物の成長促進、畜産物の質の向上などを実証してきていますが、この技術をさらに大きなスケールで、気候条件も二期作、三期作に適した東南アジアに展開したいと考えているところに、私の現役時代に東南アジアで事業活動をした経験が、役に立ってないかと考えた次第です。東北復興からは少しずれてしまいましたが、この活動を通じて広く世界の子ども達の将来の食の安全に貢献したいと思っています。

今年5月の末には、インドのコルカタに出かけ、インド側のパートナーとドローンを使った農業用地の視察を行いました。また、西ベンガル州政府のプロジェクトで行なわれている養豚場や養鶏場なども訪問しました。世界に通用する農場としての認定も受けており、清潔で臭いも全く無く、日本の現状よりもはるかに進んだ管理の現場を見学して、

その技術レベルの高さに驚きました。そもそもこの技術は、自然界から集めた土壌微生物を有効選別培養して、人と動物に無害安全な好気性と嫌気性の有効微生物などを一つのコロニーとして作り上げたもので、家畜飼料に配合して家畜に与えると食肉や鶏卵の質を向上する効果があり、また、家畜の排泄物に混合して堆肥を作り肥料にすると、有機廃棄物などを分解して土壌を改良することが出来る優れた地球環境保全型の複合微生物技術です。

当NPO法人では、この技術に独自の特殊微量酵素を関与させ、100℃でも発酵分解を可能にしたことにより、優劣決定因子によって有用遺伝子を活性化させ、作物の成長促進、食味改善及び免疫力の向上を行い、また同時に有害遺伝子の調節により有害物質の排除を可能にしているものと考えています。ちなみに、同様の有機農業資材として、過去にEM菌と言うものが世の中に出回ったことがあります。これは乳酸菌主体のもので、発酵過程で60℃を超えると殆ど死滅してしまうため、人体に有害な物質を分解する力は持っていません。複合資材の元となる微生物は、2015年にノーベル生理学・医学賞を受賞された大村智博士が日本国内の土壌から放線菌を発見されたと同様に、日本国内の土壌から発見されたものです。一説によれば、現在世の中で発見されている有効微生物は、その推定数の4%程度しか発見されていないとも言われていますので、今後も新たな有効微生物を発見してゆく努力を仲間と続けて行くつもりです。
(NPO法人 地球環境開発研究会 副理事長・元 日立化成(株) 執行役専務)

京都祇園祭の「鷹山」復興を目指して

山田純司 (1976年 経・経)



経鷲会の皆様、1976年卒 京都在住の山田純司と申します。

上智大学の校章には鷲が描かれています。真理の光を目ざして力強くはばたく鷲をかたどったもので、その姿は上智大学の本質と理想とを表わしています。

ところで、鷲と鷹の違いを御存知でしょうか？

- ・鷲はタカ目タカ科で日本で最大・最強の鳥類です。
 - ・鷹もタカ目タカ科の鳥類で、鷲より小さく3分の2くらいで、体色は鷲よりも褐色よりです。
- そうなんです、鷲も鷹も同じ鳥類で、大きなものを鷲、小さなものを鷹と呼ぶそうです。

前振りが長くなりました。私は日本三大祭りの一つ、祇園祭りの休み山「鷹山」復興を目指している、公益財団法人鷹山保存会の理事長をさせて頂いています。鷹山は会社がある衣棚町が運営して来た鷹匠・犬遣い・樽負いの3人の御神体を乗せた曳き山でした。

祇園祭はユネスコ世界文化遺産に登録されて、7月の京都は祇園祭一色となります。現在7月17日の前祭(さきまつり)に23基の山鉦が巡行をして、23日の後祭(あとまつり)に10基が巡行しています。4年前に大船鉦が復興して大きな話題になりましたが、休み山と呼ばれる山があと2基あります。

その一基の鷹山は応仁の乱前からその存在が確認されていて、幾多の災害を乗り越え数百年の長きにわたって後祭巡行に出ていましたが、大風雨の被害を受けた文政9年(1826年)の巡行を最後に以後「休み山」となりました。

近年、復興の機運が高まり2015年に設立した財団法人 鷹山保存会は翌2016年に公益財団の指定を頂きました。

多くの方から御支援を頂きながら、順調に復興の道を歩んでいますが、約2億円の再建費用や人的組織がまだまだ不足しています。

3年前に結成した囃子方こそ48名が集まり通年3回の練習会をしています(私も笛方として参加しています)、建方(縄がらみと言われる釘を使わず山を組み上げる)、車方(木や竹を使って方向変換を図る)、屋根方(屋根に乗って電線・電柱をかわして進める)等々、山鉦巡行には多くの特殊技術を持つ人材が必要です。

祇園祭山鉦連合会にも加入させて頂き、他の山鉦からの協力を得て一歩ずつ進んでいます。

私は行政への対応、マスコミ取材の窓口、各種案件の折衝、八坂神社さんの行事出席、山鉦連合会の会議の出席、また理事長とは言い事務局員がいないので寄付の御礼の発送、会議の設営・案内・議事録作成、問合せ窓口と全ての雑事もこなしています。

本年63歳になった私には絶好の老後のライフワークが出来て本当に幸せです。何とか70歳までには復興させたいと思っています。

経「鷲」会の皆様、どうぞ「鷹」山をお見知りおき頂き、応援のほどよろしくお願い致します。



ところでプロ野球では今のところ、鷹のソフトバンク Hawks が鷲の楽天 Eagles より強いようです。

来年も7月21日から23日まで、三条通り新町東入るにてお囃子のお披露目と授与品の販売を行っています。ソフィアンの皆様、是非ともお越し下さい。

※鷹山 HP <http://www.takayama.or.jp/> 祇園祭・鷹山で検索して下さい。

(公益財団法人 鷹山保存会 理事長・山音(株) 代表取締役)

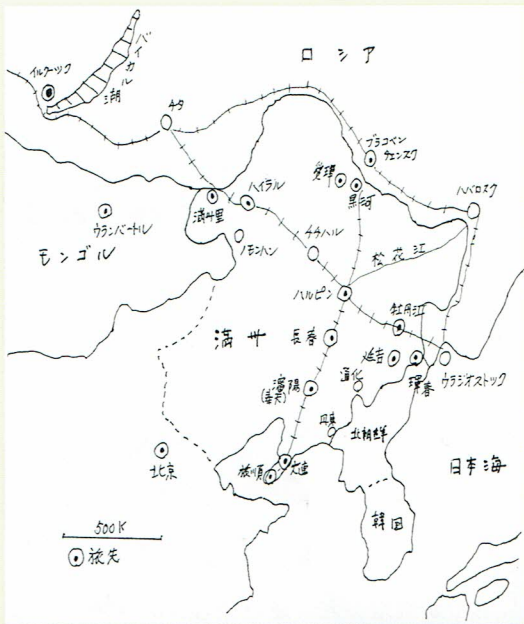


50年戦争と満州(下)

金剛輝雄 (1964年 経・経)



(前号では、旅順から始まって、大連、奉天、長春、ハルピン、黒河・愛琿に至る見聞記をご紹介した。本号は、その続きである。一編集部)



牡丹江

ハルピンから東清鉄道に乗車、車窓から見る景色は高粱やトウモロコシ畑が延々と続く。ところどころに見える朽ち果てた民家は満蒙開拓団の住居跡。現在も中国人が住んでいた。

牡丹江駅から徒歩10分、ウスリー江を望む大広場の中央に関東軍に勝利した大きな記念碑があった。やや誇張された面があり、中国共産党の反日教育の象徴となっていた。またソ連が侵攻し多くの開拓団の人々が逃げ惑った所で心が痛んだ。



延吉

かつて朝鮮の領土だったのを中国が侵略して朝鮮(北朝鮮)自治区としたところ。人口220万、漢族、朝鮮族、回族、女真族など19の民族が入り混じる町。ハングル語が氾濫し、北朝鮮のようだ。レストランで夕食をとりながら歌謡ショーを見ていた時、年配の店主の態度が挙動不審だった。よくよく聞いてみたら我々2人を北朝鮮の諜報員と誤解していた。彼女は日本語がペラペラだった。歌手と踊り子は6か月ビザで出稼ぎにやってきた北朝鮮人だった。



琿春市防川

琿春の防川はソ連、北朝鮮、中国3国の国境にある。ここは政情が安定している時は平穏で観光客も見られるが、政情が緊張すると危険な場所になると云う。写真は防川から見た北朝鮮のホテル。人影が肉眼でみえた。

昭和20年8月、ソ連が参戦した時、関東軍司令部は長春を撤退、琿春から南西300キロの通化に移動。将兵は南方戦線に転属し、司令部は櫛の歯が抜けたような状態で機能を失っていた。



ハイラル

ハイラルは中国の内蒙古自治区で人口26万人。市街はキチンと整備され、繁華街(写真左)は大型デパートを核に中小商店が立ち並び来街者で大賑わいだった。過疎地と思って来たが大間違いだった。

また当地は戦時中はノモンハン事件の補給基地となり関東軍の要塞(写真右)があった。





E-AGLE Network

ノモンハン

ハイラルの南250キロのノモンハンへは時間と交通手段が見つからず行けなかった。しかしここで起きた事件はよく理解しておく必要があるので、詳しく記しておきたい。

この事件はモンゴル側を流れるハルハ川を挟んだ両国の国境線をめぐってソ蒙軍と関東軍の戦いだった（写真はネットから）。

第1次は昭和14年5月～6月、第2次は昭和14年7月～9月の2期に分かれる。

天皇や陸相の板垣征四郎、海軍大将の米内光正等の反対を押し切って、関東軍参謀の辻正信と作戦主任の服部卓四郎は戦いを強行した。1次のノモンハン侵攻は5分5分、2次では関東軍は壊滅的に敗北した。圧倒的な重火力の差だった。この事件が端緒となって世界大戦へ拡大していったことは世間ではよく知られていない。というのは昭和14年8月ドイツとソ連は独ソ不可侵条約を秘密裡に締結。ソ連軍は西側のドイツの侵攻はひとまず抑えたと判断、9月までに戦力を極東に移動、7月～9月にかけての2次事件で一気加勢に攻撃、関東軍を壊滅的に敗北させた。ソ連は独ソ不可侵条約をその後破棄し、ドイツと開戦、第二次世界戦争へと拡大していく。関東軍はソ連軍のこうした動きを察知していなかった。



満州里

中国、ロシアとの国境。満州里はかつてモンゴルに属していたが、清朝時代に中国領となり現在は中国の内蒙古自治区となっている。大興山安嶺山脈にはさまれた細長く南西に伸びる大草原地帯である。ノモンハン事件ではこの満州里はロシア軍にとって重要な拠点であった。軍需物資はシベリア鉄道を使って、モスクワからイルクーツク、バイカル湖、チタを通して当地に輸送された。商店街はロシア語と中国語併記の看板が目立ち、食堂はロシア料理のメニューが多かった。



イルクーツク

シベリアの古都であり、中国東北部にでる要衝だった。帝政ロシア時代の大聖堂や教会が立ち並び、バイカル湖を水源とするアンガラ川がゆったりと流れ、落ち着いた町である。イルクーツクを通過するシベリア鉄道は先述の通り、軍用路線として大きな役割を果たした。現在は鉱物資源、とくに石炭を輸送する路線として使われている。日本軍のシベリア抑留者は76万人といわれ、抑留先は40ヶ所を越えるが、中でもイルクーツクには5万人、チタが4万6千人と多く、沿線地区の森林の伐採、鉄道路線の補修などが抑留者の仕事であった。冬は酷寒の中で重労働に耐えられず死亡するものが多かった。ガイドブックには日本人墓地があると出ていたが、どこにあるか現地の人に聞いても分からなかった。



バイカル湖

神秘的な湖。憧れのバイカル湖にようやく着いた。麻布狸穴のロシア大使館からビザをとるのに大変苦労したから喜びはひとしおだ。同湖は北西に横たわる全長600キロ、世界1、2を争う淡水湖だ。静寂さと雄大さに圧倒された。展望台に到着するまで迷いに迷い40、50分、同じドイツ人親子と展望台に通じるロープウエーを見つけた時はホッとした。

最後にこの旅を通してとくに感じたのは戦争で一番問われるのは軍人官僚の器量ということにある。彼らは独善的で自己の立身出世を夢見たいわゆる秀才達だ。器量は狭く、現場を無視し、天皇の統帥権をもしばしば犯した。その結果が敗戦であった。

満州には日本から満蒙開拓団として多くの日本人が入植したが、満州建国をめぐって中国人との抗争や軋轢がどんなものであったかを想像すると、夜汽車の中で出会った中国人の我々日本人に対する視線の厳しさも合点がいく。戦後70年以上経っても中国の一般の人々の憎しみは消えないことを旅の様々な場面から否応なく意識せずにはいられなかった。

「歴史は繰り返す」と云われるが、今の世界の情勢を見る時、こんなバカなことがまた繰り返されるのではないかと危惧しつつ私の旅は終わった。

参考にした本

中央文庫出版 石光真清の手記4部作 「城下の人」「曠野の人」「望郷の歌」「誰のために」
(慶應4年～昭和17年 74才 陸軍少佐 満州での諜報活動に従事)

新潮社出版 船戸与一著 「満州国演義」9部作

(「風の払暁」「事変の夜」「群狼の舞」「炎の回廊」「灰塵の暦」「大地の牙」「雷の波濤」「南宴の雫」
「残夢の骸」)

ダメ人間 万歳



三輪一夫 (1978年 経・経営)



これは先日、金沢ローカルで放送された、ある上方落語家のドキュメンタリーの題名だ。昭和45年兵庫県出身、国立大学工学部を卒業後、大手重機械メーカーに入社しキャリアの道をまっしぐら。大学在学中は古典落語に親しみ、古今亭志ん朝のファンだったという。自身も落研に所属していたが、プロになる気はさらさらなかった。

ところが、あろうことに部下も出来てきたある日突然、上司に辞表を出して上方落語家の内弟子となり、三重の松阪で住み込みの無給生活へ。最初の仕事は留守番と子守り。

その師匠は、人気落語家桂枝雀（カツラシジャク）の弟子、桂文我師匠（カツラブンガ）。

ということは、先頃亡くなった上方落語界の救世主、桂米朝（カツラベイチョウ）一門につながることになる。

入門後、文我師匠から授かった名前は、一度聞いたら忘れない「桂まん我」（カツラマンガ）。

現在、東京と大阪合わせた落語家の数は700人を超えるという。

落語協会などの団体に所属すれば、末広亭をはじめとする寄席（定席）に出演できる東京。一方、常設の寄席が天満天神繁昌亭しかなく、お寺、ホール、集会所、蕎麦屋や居酒屋、料亭などの公演会場を自分で探さなくてはならない大阪の落語家は、全国津々浦々旅巡業の日々を送る。そのバイタリティーには、ただただ敬服するしかない。

落語＝笑点と思っている人がほとんどの中で、まん我師匠は明治大正の日常を描いた古典落語を得意としている。

大店の主人、お内儀、若旦那、番頭、丁稚、女中、侍、大工、船頭などを自由自在に演じ分け、その手にかかれば、さりげないマクラで笑っているうちに、観ている者を一気に時代に引きずり込む。

皆様ご存知の八っあん熊さん、ご隠居も、声の大小や高低と切れ、スピードを変えないと聞く方が混乱し、リラックスするどころかかえって頭が疲れてくる。まん我師匠の持ち味である登場人物の的確な演じ分けは、目をつむって聞いていても場面、情景が浮かんで来るし、その声の心地よさも大きな特徴だ。

とはいうものの、師匠曰く、落語は日常に不必要な娯楽で競争も激しい世界だけに、東京ではなかなか名前が広まらない。しかし、多忙でストレスがたまり、煮詰まる寸前のビジネスマンや実業家にとっては、落語の笑いは気分転換の良薬であると共にコミュニケーションに最適のテキストであろう。そして、人生は一通りでなく、聖人君子ばかりでもなく、表題のようなこういう生き方も有りということ、さりげなく教えてもらったような気がするのだ。



桂まん我師匠

新社会人として

太田原こころ (2017年 経・経営)



上智大学を今年の3月に卒業し、私の人生23年間の大半を占めた長い「学び」の期間を経て、これまでの生活とは全く違う環境での「社会人」としての日々がスタートして半年が経とうとしています。

学生時代は「今のうちにしかできない経験をしておきなさい」という言葉をよく耳にしましたが、社会人となった今、本当にそのことを実感しています。私の拙い経験から、後輩の皆さんに、学生時代にやっておいたほうがよいことをご紹介しますと思います。

私は、学生時代にやっておいてよかったと思うことが2つあります。1つは、様々な背景や考え方を持つ人々と積極的に交流したことです。例えば、所属していたGlobal-Networkを通して多くの留学生と交流したり、時には複数の大学の学生が参加するイベントで意見交換をしたり、多様な人々と接する機会が多くありました。社会人になってみて、自分が付き合う人を自分で決められないということに気がきました。ウィークデイは、一日の大半を職場で過ごします。職場では、会社の同期や上司と連携して作業をしなくてはなりませんし、その中で自分とは違う考えを持った人がいてもその人を選んで仕事をするわけにはいきません。また、先輩の話では、あまり相手を知らないうちは考え方が違うし、好ましいとは思っていなかった人が、一緒に仕事をしているうちに、実は非常に役に立つ考えを持っていて、刺激を受けることがある、ということがよくあるそうです。先入観を持たずに、違った考えの人たちを受け入れ、一緒に仕事をして、より価値のある成果を挙げるには、学生時代に、多くの学生や留学生と関わって多様な考え方に触れることが、後に生きてくる良い経験になると、今、思います。

2つめは教養を蓄えおくことです。教養は短時間で身につくものではありませんし、社会人になっても常に何かを学ぶ時間と機会を持つことは大切ですが、十分に考える時間のある学生のうちにぜひやっておくべきことのひとつではないでしょうか。社会人となっても空いた時間を活用したり、休日を使うことはできますが、学生時代に比べてプラ



E-AGLE Network

イベントに使える時間は圧倒的に限られます。また、仕事についての勉強に時間とエネルギーを割かなければならないこともたくさんあります。興味のあることをとことん調べたり新しい何かに挑戦したりできる自由で創造的な時間は学生ならではの特権ですし、とても貴重です。

私は上智大学に入学するために上京してから西洋美術やオペラに関心を持つようになりました。授業の合間に大学の図書館で好きな作品に関する本を読んで知識を深め、休日に展覧会や舞台を観に出かけて「本物」に触れることに時間を使いました。そういう自由な時間は学生時代の特権であり、貴重な経験だったと思います。そして、その貴重な経験や蓄積した知識は、これからの仕事や人間関係に必ず生きてくると思います。

私は4年次に履修していたファッションビジネスの授業を担当されていた岡野先生より経鷲会女子部会発足のお話を伺い、活動にお誘い頂いたことがきっかけで経鷲会とのご縁ができました。大学進学を機に九州から上京してきた私にとって、4年間通った上智大学は知らぬ間に私にとっての東京での「ホーム」になっていたようです。卒業してからも経鷲会に参加させて頂くことで、引き続き母校の発展に携わることができることとなり大変嬉しく思っております。まだまだ未熟ではありますが、今後も経鷲会を通して在学生と卒業生とが触れ合えるような楽しい企画を考えていきたいと思っております。皆様どうぞよろしくお願いたします。

経鷲会だより

○定期総会のご案内

会 場：上智大学紀尾井坂ビル 502 教室
と き：2017年11月11日(土) 13:00 代議員会、総会
13:30 講話：青木研学部長 「経済学部の今」
14:00 講演：林 祐氏 (元海将補 80経・経) 「3.11 自衛隊の闘い」
15:30～17:00 懇親会 (主婦会館プラザエフ) 会費 3,000円
17:00 閉会

※林 祐 (はやし ゆう) 氏は危機管理 (クライシスマネジメント) のプロフェッショナル。海上自衛官在任中、東日本大震災に遭遇した。港に迫り来る大津波、その時、氏がとった行動とは！

○新春狂言鑑賞の会

日 時：2018年1月18日(木) 18時30分開場 19時開演
ところ：新宿文化センター大ホール 出 演：野村萬斎 茂山千五郎
演 目：二人大名 魚説法 釣針 会 費：5,000円
申し込み／お問い合わせ：三輪一夫 (78経・経営) 【dzj03720@nifty.com】

○経済人倶楽部新年賀詞交換会

日 時：2018年1月17日(木) 18:30より
会 場：ソフィアンズクラブ (Sophia Tower 6F, TEL: 03-3238-3075)
会 費：7,000円 (2009年度以降の卒業生 4,000円)
お問い合わせ：上原隆一 【uehara@eagle.sophia.ac.jp】

エコノミアン編集後記



小泉基靖 (1969年経・経)

私がエコノミアン編集長に就任したのは平成26年3月、それまでの編集長である高増文さん、田村 隆さんの後任としてでした。エコノミアン46号から今回の53号まで担当し、在任期間は3年半になりました。その間に経鷲会役員会への出席、各種イベントへの参加、インタビュー及び原稿集め等々苦勞もありましたが、色々な方々との出会いや楽しい飲み会にも参加することが出来、お蔭様で自分にとって大変勉強になったと感謝しております。

特に小薬印刷所のスタッフの方々には大変お世話になりました。発行を重ねる毎に内容が充実してきたことは裏方の皆様のお蔭でもあったと感じております。

これからもエコノミアンが更に素晴らしいものとなるよう、次の編集長となられる戸川清さんに期待して私の引継ぎといたします。皆様、ご愛読誠にありがとうございました。

－年会費納入のお願い－

同封の「払込票」にて年会費3,000円の払込をお願い致します。あわせて、寄付金によるご支援・ご協力をお願い申し上げます。